

🏠 子どもをどうしてる？（育児・保育編）

SFになった時に子どもが何歳だったかにより、その後の生活は大きく異なります。小学校入学前は、保育園で食事が出るし延長保育（20時までのことが多い）も利用できますが、小学校に入ると、放課後の過ごし方が課題になってきます。川崎市内では、「わくわくプラザ」（学童保育）の利用経験が多いですが、その他の経験談も参考にしてください。

休日

保 育園や学校が休みになる夏休みなど、長い休日をどう過ごすかは、先輩SFに聞いてみたいことのひとつでした。子どももまだ保育園と小学校1年生ですし、親が連れて出かけるのに、どこに行けばいいのかわからない。子どもが小さいうちは、公園に出かけたり、買い物（ウィンドウショッピング）に出かけるので十分。小4くらいからは少年野球とかをやらせたり、塾や習い事に行かせたりしたと聞きました。連れて出かけることはしているで、今のままでいいんだと安心できました。

イライラ・マネジメント

子 どもがなかなか言うことを聞かないので、腹が立ってイライラをぶつけては反省する、その繰り返しで自己嫌悪に襲われることも多くありました。そのときは、自己修練の本とかイライラする心を見つめる方法を探してもいました。今思えば、子どもが大人の言うとおりにできないのは当たり前なのに、温かく見守れるまでに何年もかかりましたね。

6：調査に協力したSFから聞いたものです。市内には他にも同様の民間施設等がありますので、ご自分の事情等に合うかどうかは、直接施設等へお問い合わせください。

ママ友って大事だよ

小 学校の面談やPTAの懇親会など、子どもが小学校に入ると、“親”として学校に行く機会が増えます。でも、お母さんばかりで、父親は自分だけということがほとんどです。最初は気になりましたが、子どものためにはそうも言っていられません。遠目に見ていたお母さんたちも、こちらが事情を話せば、“ママ友”になってくれるんです。ママ友は、子どもに関する情報をすごくたくさん持っています。学校行事や、子どもを行かせる塾の評判、放課後に預ける施設、これからできる制度や施設についてなど、本当にいろいろと教えてもらいました。

ママ友との距離感も大事だよ

子 どもを通じて仲良くなること多いママ友。ママ友がふたり親の場合には、配偶者の方が誤解しないように、距離感が大事になってきますね。僕は、近所のママ友とだけ話すのではなく、夫婦と仲良くできるよう、気をつけていました。何でもないので、疑われたくはないですもんね。



放課後

子 どもが保育園児から小学生になったとき、預かってもらえる時間が1時間早くなりました。これに合わせて、仕事の終わり方を変えるのに苦労しました。もちろん、普段は定時に帰ることができるように会社では理解を得ているのですが、どうしても、残らないといけない日もあります。そういう時、「わくわくプラザ」を利用しているママ友から、「わくわく」の後にいける民間の保育サービス⁶を教えてもらいました。今では、遅くなる日は、「わくわく」から子どもたちが一緒にそちらに移動することで、僕の迎えを待っています。なんとか「小1の壁」を乗り越えていけそうです。

🔍 小1の壁

大都市では、保育園に入園させるのが難しいことは、「待機児童問題」として以前から課題でした。小さい子どもを育てながら働く女性（ワーキングマザー）にとって、「保活」（子どもを保育園に入園させるための事前のさまざまな活動）の次に立ち上がるのが「小1の壁」です。保育園は延長すれば20時頃まで預かってくれるところもありますが、小学生になると放課後がで、わくわくプラザ（学童保育）の終了時間は遅くても19時です。そのため、19時までに子どもを迎えに行けるかどうかで、仕事を続けられるかが決まってくるのです。出産後、産休・育休を取りながらなんとか続けてきた仕事をこの「壁」を乗り越えてまで続けられるかどうか、その条件を持っているかどうかでワーキングマザーのキャリアは大きく影響を受けます。

ご近所との関係

父 子家庭になると決めた時、「子どもは地域で育ててもらおう」と思いました。できるだけ、地域の人たちに自分の事情を知ってもらい、子どものことも叱ってもらったり預かってもらったりしながら、小学生の子ども放課後が寂しくないようにやってきたつもりです。ただ、大人の居ない時に友だちの家に上がることは絶対させないようにしていました。留守宅に上がり込んで、もし、何か無くなったり破損したりした時に、責任問題になることは避けたいですし、トラブルのためにご近所との関係が悪くなるようなことは未然に防ぎたいからです。近所の屋外で遊ばせ、5時半には家に戻るよう、しつけてきたつもりです。

SFにも、ワーキングマザーと同じように、「小1の壁」があります。短時間勤務ができるかどうか、残業をしなくても帰ることのできる仕事（部署）かどうか、自身で行かなくてもお迎えを頼める親族等がいるかで、「小1の壁」が無事に乗り越えられるのかが決まってくる場合も多いのです。

この冊子で紹介されている工夫事例等もぜひ参考にしてください。

…ただ、ワーキングマザーでなくとも、SFでなくとも、子どもを自分で迎えに行くことができ、一緒に夕食を取る生活ができるような社会になるよう、すべての人が働き方を変えていけるといいのですが…。